書　　評

R・G・ウィルキンソン（斎藤修，安元稔，西川俊作訳）

『経済発展の生態学—貧困と進歩—』

筑摩書房，東京，1975，307ページ

本書の原題は「貧困と進歩」で「経済発展の生態学」は副題として用いられている．著者は1943年生まれのイギリスの若き気鋭の研究者で，ロンドン大学で経済学史を学んだのち，ペンシルヴァニア大学で地域科学を修めたという．

序論において著者は，本書の主要構想を「経済発展にかんする学界の支配的見解に真向うから対立するもの」としてまとめるとともに，「今日では周知の問題に接近する新しい途を提供したい」と述べているが，このことばに示されるように，既成の経済発展論や進歩史観にきわめて挑戦的な立場をとっており，随所に著者の若さが感じられる．

著者は，経済発展を広い生態系の一環としてとり扱っている．「経済の発展は人口増加と資源の枯渇のはさみうちから生ずるところの，生態系の不均衡から社会が逃れる唯一の道」であり，この立場にたって，社会の史的発展をみなおそうとしている．自然を与件として扱う従来の経済学に対して，あくまで人口増加——生態系の変化——経済発展というモデルをその論理の基礎とする．広い意味での生態系の環の中で経済社会を考えねばならないと主張している．そのためには，経済学・生態学はもちろん，歴史学・文化人類学等の助けを借り，従来の経済学・生態学理論の応用から，学際的な研究により理論の枠組をひろげようとしているように思われる．

この本の中で著者は，生態系の変化に決定的な影響を与えるのは人口増加であることをくり返し強調している．人口と資源との関係を中心とする生態環境が変化すると，社会は新たな，またしばしばもっとも難かしい方法でその環境の利用を図らねばならなくなる．社会がその資源基盤と生産組織に比べて大きくなり過ぎた時に，発展が必要になるという．従って，生存の問題がより深刻になるにつれて，社会はそれらの方法の変更を余儀なくされる．「発展は貧困からおこるのであって，豊かさからではない」ことを著者は多くの歴史的事実に基づいて立証しようとしている．人間社会は，その歴史の大部分の期間を通じて，生産組織に比べて大きくなりすぎた結果生ずる生態系の問題を組織的なやり方で回避してきた．人口増加を阻止するやり方は，その初歩的なものであるが，それが崩れ，生存が危機にひんした時に，変化の最初の段階があらわれることを説いている．

また，「工業化社会，産業社会こそ，生産組織が危機的状態へおちいることがないように制御する安定装置を欠くという点で歴史的に特異な存在」であり，工業化が進むにつれて，大量消費がより進行し，生態系の均衡破壊がより一層進行する，そして生態系の変化に最も重要な役割を果たすのが人口増加だという著者の考え方をもってすると，現在すでにぼう大な人口をもち，なお依然として高い出生率を示している多くの発展途上国の将来はどうなるのかというおそれが当然生じてくる．この点について著者はあまり多くを語っていない．しかし，本書に展開された論理からして，発展途上国の問題は著者にとっても重要な課題となるはずであり，その解明をまって，彼のいう「経済発展の生態学」が完成するのではないかと思われる．

著者の主張は，多様な人類の「発展」の歴史をあまりに単純にモデル化しすぎるおそれなしとしない．また人口増加を重要なモチーフとしながら，人口増加に対する分析を欠くきらいがある．なぜ人口が増えるのかについて，著者の考えを聞きたいと思う．　（中野　英子）